メタ言語的否定と「エコー」

三　木　悦　三

1．Carston（1996）

以下のような例が、いわゆるメタ言語的否定 metalinguistic negation の典型的な事例として、しばしば引き合いに出される：[1)]

（1）a. We don't eat tom[a:təuz] here, we eat tom[eiDəuz].
b. He isn't neurotic OR paranoid ; he's both.
c. I haven't DEPRIVED you of my lecture on negation ; I've SPARED you it.
d. She's not my mother ; she's my female progenitor.
e. The President of New Zealand ISn't foolish ; there IS no President of New Zealand.

周知のように、これらの発話は、最も一般的には、先行する他者の発言[2)]（の一部）に対して異議を唱えるに際してもちいられる発話であり、Horn（1985）の説くようにその否定の機能を 'I object to U'（U：a linguistic utterance）とひとまず理解しておくことができよう。メタ言語的否定（MN）では、Horn によれば、否定語 negation operator は非真理関数的 non-truth-functional に作用し、これは否定語が真理関数的 truth-functional に命題に作用する通常の記述的な否定 descriptive negation とは区別される。MN が非真理関数的であるというのは、たとえば、（1a）では「われわれはトマトを食べない」「われわれはトマトを食べる」という相反する事実が主張されているのではなく、tomato という単語の発音の仕方が問題となっているということであり、したがって、（1a）は同一の話し手がおなじ発言の前段において「トマトを食べない」ことを断定し、後段ではこれとは裏腹に「トマトを食べる」ことを断定する矛盾 logical contradiction を犯しているわけではなく、このような事実の真偽とは係わりをもたない単語の発音という、

言葉の形式的な側面 linguistic form が問題となっているということである。一方、これに対して記述的否定（DN）は真理関数的であり、Carston（以下、C.）の挙げる例にそくして述べれば、

（2）　We didn't see the hippopotamuses.
　a.　We saw the rhinoceroses.
　b.　We saw the hippopotami.

たとえば、（2）に(2a)が続く発話では、まさしく事実の如何が問題となっているのであり、「われわれがカバを見なかった」ことが前段で真 true として主張されるとともに、後段において「われわれがサイを見た」ことがやはり真として断定されている。C. の言うとおり、'The negative statement and the following clause are consistent with one another : there is one set of creatures in the world that we didn't see and there is another different set of creatures that we did see.' [p.310] ということであり、(2)－(2a) の前段と後段の異なる主張は（2）に（2b）が後続する発話が DN として解釈された場合に生じる矛盾（「われわれはカバを見なかった、かつ、われわれはカバを見た」）を生じない。

このように、否定に関して DN とともに MN という現象の存在することが指摘されうる次第であるが、問題はこの DN と MN の相違をどのように定式化するかという点に係わる。いま上では DN は真理関数的に作用し、MN は非真理関数的に作用することを述べたが、これは Horn 流の通説的な見解であって、C. 自身は DN と MN がこのような規準によって区別されると了解しているわけではない。C. としては否定語 negation operator が、ある場合には真理関数的に働き、別の場合には非真理関数的に働くというような曖昧さをもつのは直観に反する（'intuitions are violated by the idea that 'not' itself is ambiguous' [p.311]）という判断に立って、DN/MN のいずれの場合にも否定辞 'not' は一貫して真理関数的に作用するという立場を採る。そして、MN 一般について観察される次の(A)－(E) の特質のうち、

(A) Felicitous metalinguistic use standardly involves the 'contradiction' intonation contour (a final rise within the negative clause), followed by a correction clause, and contrastive stress on the offending item and its replacement.

(B) The metalinguistic use of negation standardly occurs in rejoinders to utterances of the corresponding affirmative.

(C) They are garden-path utterances, requiring double processing (pragmatic reanalysis) in order to be correctly understood. "... the descriptive use of negation is primary; the non-logical metalinguistic understanding is typically available only on 'second pass', when the descriptive reading self-destructs." (Horn, 1989 : 444)

(D) Taken literally (*i.e.* not metalinguistically) the two clauses in each example constitute a logical contradiction.

(E) The material falling in the scope of the 'not' is mentioned (metarepresented, quoted, echoic) rather than used. [p. 312]

最後の (E) こそが MN を MN たらしめる最も本質的な性質であることを C. は主張する：

(3) The last property is, in my view, the only one of the five which is essential to this use of negation. The frequent, though by no means inevitable, presence of the other characteristics is a consequence of the metarepresentational nature of the material in the scope of the negation. [p. 312]

こうして、C. は真理関数的な 'not' とともに非真理関数的な 'not' を認めるか否かをめぐって Horn と対質すると同時に、他方、(1 e)のように発話の前提が否定されるケースをも含めて、MN の事例は、これを DN として解釈する場合には、つねに論理的矛盾をきたすという立場を採る Burton-Roberts とも、この Burton-Roberts の見解が妥当であるかどうかをめぐって確執する。本稿では、しかし、 C. の提示する MN 分析に議論の焦点を絞り、(E) の特質、すなわち、否定の作用域に置かれる表現 linguistic material が、いわゆる「使用 use」ではなく、「言及 mention」されていること — この点に MN を DN から区別する本質的な特徴があることを説く C. の所論がはたして首肯するに足るものであるか否かを論じたい。C. が関連性理論の主要概念である echo を MN の分析にもちいる以上、ことがらは echo という概念の吟味にとどまらず、関連性理論それ自体への批判を含むものともなるはずである。

2．メタ言語的否定（MN）と「エコー」

さて、前節で概括したように、MN の分析に本質的であるのは否定の作用をうける表現が echoic に「言及」されているかどうか、この点に懸かっている。C. はこのことを再度、確認する：

（4）The correct generalization about the metalinguistic cases is that the material in the scope of the negation operator, or some of it at least, is echoically used, in the sense of Sperber and Wilson (1986), Wilson and Sperber (1988, 1992).　[p.320]

Sperber & Wilson（以下、S&W）にしたがえば、と C. は続ける、echo 的発話は次のように定義される：

（5）A representation is used echoically when it reports what someone else has said or thought and expresses an attitude to it.　[p.320]

すなわち、他者の発言（ないしは思考）をおうむ返し的に繰り返すと同時に、話し手が当の発言に対して一定の態度を表明する発話、これを echo 的発話と称する。たとえば、

（6）a.　*The obnoxious beady-eyed woman* is my wife.
　　b.　It's a lovely day for a picnic, indeed.

(6 a) の斜体部は話し手が自分の妻をこのように真理関数的に記述したとも解釈できるが、より普通には、むしろ斜体部の記述を話し手は誰かしら第三者に帰属させ、同時にそのような記述の仕方に対するみずからの（不賛同の）態度を表明したものと解される。同じように(6 b)も率直な現実の記述、事実の断定ともとれるが、しかるべき状況では、話し手が他者の発言ないしは思考を問題にし、この他者の発言(思考)を指示するために(6 b)を発話しているとも解される。S&W 流に言えば、後者では話し手は echoic に他者の発言(思考)に「言及」すると同時に、これに対して一定の態度(皮肉)を表明しているものと見なされる。このように echo をとおして話し手の態度が差し向けられる対象は、（6）のような発話の意味的・概念的な内容に加えて、（1）にも見るとおり、'linguistic factors such as phonetic, grammatical or

lexical properties, aspects of dialect, register or style, and paralinguistic features such as tone of voice, pitch or other gestures, audible or visible' [p.320] と発話の「言語形式」のさまざまな側面にわたりうる。しかし、ともあれ、echoic な発話一般に共通する眼目は、

(7) a representation is being used not to represent an object or state of affairs in the world but to represent a representation [p.320]

すなわち、現実の対象や事態を表すのではなく、別の発言（ないしは思考）を表すという点であり、echo という行為は事実の真偽認定に関心が置かれる通常の記述的な言語使用とは異なって、echo される対象との類似性 resemblance にその存否が懸かっている旨が説かれる：

(8) In such cases the relationship between representation and that which is being represented is not the familiar truth-based descriptive sort but is one of resemblance. [p.320]

以上に概観した echo の概念を、C. にしたがって、具体的な MN の事例に当てはめてみよう：

(9) a. Around here we don't eat tom[eiDəuz] and we don't get stressed out. (We eat tom[a:təuz]and we get a little tense now and then.)
b. Since when have you been eating tom[eiDəuz] and getting stressed out?

(9a) の 'tom[eiDəuz]' は個物としてのトマトを指しているわけではなく、第三者の発したと思われる tomato の特定の発音を近似的に再現したものであり、同じように 'get stressed out' も事実に係わる記述ではなく、他者のもちいた同じ言語表現に言及している。[3] (9b) もこれらの点では同工である。(9a) (9b) の echo 的表現は、このように先行発言に言及すると同時に、それらに対する排斥 rejection という話し手の態度を表明する。[4]

さらに、echo という行為には、それが明意的 explicit に行なわれる場合と暗意的 implicit に遂行される場合があることを C. は付言する。'Is the

correct pronunciation eSOTeric or esoTERic？' という発話に対する 'It's not eSOTeric；it's esoTERic.' という発話は、esoteric という単語の発音が発問－応答のポイントとなっている点で明意的であるが、たとえば、'Is her dissertation terribly eSOTeric？' に対して 'It's not eSOTeric；it's esoTERic.' と応じる場合には、応答者は発問者の「論文」に関する問いに答えるかたちをとりながら、同時に発問者の発音の仕方をも問題としている点において暗意的と見なされる。この暗意的な echo が MN には不可欠に関わる旨を C. は主張するのである：

(10) This, I claim, is the crucial property of so-called metalinguistic negations : the representation (or a part of it) falling in the scope of the negation operator is implicitly echoic. [pp. 320-321]

3．メタ言語的否定と記述的否定（DN）

このように、直観的にも妥当かと思われる議論を提示しつつ、echo という概念装置による MN 分析の骨子を披露したあとで C. にはある執拗な疑念が生ずる。すなわち、MN が echo によって説明されうるとしても、echo される対象はすでに眺めたように多様であり、言語形式から他者の発言（思考）内容にまで及ぶ。しかも、echo の仕方は明意的な場合もあれば暗意的な場合もある。echo が類似性にもとづく以上、S&W のアイロニー分析にも認められるように、他者の発言を繰り返すに際しても必ずしも言葉どおりに復誦することは要求されない。加えて、繰り返しの対象は誰かの実際に行なった発言にかぎられず、通念的な期待もしくは想定 general assumption [expectation, hope] もまた繰り返しの対象となる。では、これらの echo が含まれるすべての場合を MN と見なすことができるのか。そして、その場合に通常の DN との区別はどのように行なわれるのか。C. の心にこのような疑念を引き起こすのは次のような事例である：

(11) a. X： Isn't it tiring for you to drive to work ?
Y： I don't DRIVE to work; I JOG.
b. X： Oh, you're in a miserable foul mood tonight.
Y： I'm not in a miserable foul mood; I'm a little tired and would like to be left alone.

c. Winning isn't everything; it's the only thing.
d. They're not the best at what they do — they're the only ones who do what they do.

たとえば、(11a) では、YはXの発言の真理関数的な内容に異議を申し立てているのであり、したがってYの 'I don't DRIVE to work' は DN と解されるべきであるのか、それともYはXの単語（'drive'）の使い方という「言語形式」に対して異を唱えているのであって、MN と解釈されるYの 'I don't DRIVE to work' が偶々この文脈では真理関数的な命題の違いともなって反映しているということなのか。C. は(11a)(11b)に関して以下のような率直な所感を述べる：

(12) It is not clear to me whether we would want to say that Y in each case is objecting to the truth-conditional content of X's utterance or to something more formal like the use of a particular lexical item or phrase, which happens to make a truth-conditional difference. [p. 323]

同じように、(11c)(11d) についても 'Again, it is far from clear whether it is truth-conditional content or lexis that is being objected to.' [p. 323] と C. は疑念を表白する。しかし、ことがらは自説の根幹に係わるそれであり、C. としては echo という概念を中軸とする MN 分析の妥当性を確信しながらも、(11) のように MN が真理関数的な内容にも係わる（ように思われる）例を前にして、これらによって MN/DN の区別が失われてしまうことを危惧してはたと困惑するのである。C. は続ける：

(13) The reluctance to include truth-conditional content as a possible ground for objecting to someone's (actual or potential) utterance is that such echoic cases would seem then to be effectively indistinguishable from standard descriptive negations, which, of course, operate over truth-conditional content. [p. 323]

私見では、このように MN と DN とが判然と見分けがたい状況が生じるのは、C. の MN 分析が妥当性を欠くことの何よりの証拠なのであるが、C. はこのように言語表現が echoic（= non-descriptive）に解釈される場合と

non-echoic（= descriptive）に解釈される場合とを事実上、区別することができないケースは他にも見い出されることを指摘して、[5] S&W(1986)から次の例を引用する：

(14) a. Peter : It's a lovely day for a picnic.
[They go for a picnic and the sun shines.]
b. Mary (happily) : It's a lovely day for a picnic, indeed.
(15) a. Peter : It's a lovely day for a picnic.
[They go out and it rains.]
b. Mary (sarcastically) : It's a lovely day for a picnic, indeed.

S&W によれば、(14)(15)のいずれのメアリーの発言も echoic であり、(14b)では話し手（メアリー）は echo をとおして相手（ピーター）の発言を是認 endorse しているのに対して、(15b)では逆に侮蔑の態度をもってピーターの発言を排斥していると解釈される。(15b)がいわゆるアイロニーに該当するケースであるが、C. はここではむしろ (14b)に着目し、(14b) のように echoic に相手の発言が繰り返される場合 [= (16b)] と、このような echo が含まれていない通常の記述的な場合 [= (16a)] とを比較考量する：

(16) a. It's a lovely day for a picnic.
b. It IS a lovely day for a picnic (indeed). [= (14b)]

C. の言うように、(16b) はアクセントの置き方、あるいは 'indeed' という語の働きによって他者の発言が先行することを示唆する。加えて、(16a)(16b)について次のような発話効果の相違も指摘することができよう：

(17) The effects in the echoic case may well be focused on giving Peter a pat on the back for having got it right, for having exercised such good judgement, effects which might be less prominent in the case of the descriptive assertion that happens to be in agreement with Peter's earlier assertion. [p. 324]

しかし、と C. は述べて主張の核心部に触れる：

(18) However, the difference between them will, in many instances, be pretty negligible and it won't matter much which of the two possibilities the hearer derives. [p. 324]

C. 自身の述べるところによれば、ある発話がechoicであるか、それともnon-echoic = descriptiveであるか —この違いがC. の分析では否定がMNと解釈されるかDNと解釈されるかを決定する— このみずからの分析の成否を左右する解釈の相違が 'pretty negligible' であり、'it won't matter much which of the two possibilities the hearer derives' ということになる。これは一体どういうことであろうか。これではechoという概念をもちいてMNをDNから区別できるケースについてはechoによる分析を主張し、十全な区別のできないケースについてはechoであるか否かは問題ではない('it won't matter much')、別言すれば、MNであろうとDNであろうと構う必要はないと主張するにひとしいではないか。MNをDNから截然と分かつMNの本質を究明することを所期して論を起こしながら、しかも両者の決定的な相違がechoic/non-echoicの違いにあることを自論の要としながら、いまやechoicかnon-echoicかの区別は問題にならないと言い出したのでは立論そのものが態をなさない。このありうべき批判は、しかし、C. みずからも先刻承知している。C. は言う：

(19) This lack of a particularly sharp interpretive difference in the case of some endorsing echoes and their descriptive counterparts does not lead us to the conclusion that the distinction doesn't exist. [p. 324]

(16a)(16b) のように、意味解釈の上でechoicであるかdescriptiveであるかの相違が明瞭でないケースも確かにあるが、だからと言ってこの両者の区別が存在しないということにはならない。このように断言してC. はecho/descriptiveの別を堅持しようと図るのである。

C. の弁明はこの辺りからにわかに苦渋の色合いを帯びてくる。すでに引用が適度を超えているが、C. の思考の過程を知る上で肝腎な部分でもあり、もう少し引用を続けよう。(16)を踏まえてC. は次のように述べる：

(20) What I am suggesting is that the same goes for cases of echoing the truth-conditional content of the representation in the scope of negation

and their descriptive, non-echoic, counterparts. [p. 324]

つまり、いま見た (16) のように echoic/descriptive の違いが、事実上、「無視できる」場合があるのだから、この違いを規準として区別される MN/DN についても、(11) の諸例のように否定される部分を echoic に解釈するべきなのか (= MN)、それとも non-echoic = descriptive に解釈すべきなのか (= DN)、判然としない場合があっても不思議ではないという趣旨の議論である。論点の回避とも見なすべき言い分であるが、ここは C. の見解に辛抱強く付き合うほかはあるまい。C. はこの所見を(21)にそくして敷延する:

(21) A : Mary seems happy these days.
B : She isn't HAPPY ; she just puts on a brave face.

B の 'She isn't HAPPY.' という発話は A の発言にふくまれる 'Mary is happy.' を echoic に繰り返して否定したものとも、あるいは、A の発言に対する反論として descriptive にもちいられているとも解しうる。したがって、(21)のように一者 A が対話的にある発言(断定)を行ない、この断定に対して同じく対話の当事者たる別の一者 B が不賛同を表明した発言は DN とも MN とも解釈することができる。いかにも歯切れの悪い論調で C. は次のように説く:

(22) In the absence of any more specific context there is just no way of knowing. In context, the two possibilities may differ slightly in the effects they achieve or in the way those effects are achieved, the force of the dissociative attitude being stronger in the echoic case than in the descriptive case, though very often the upshot will be much the same. [p. 324]

(21) のような例では DN と MN の違いはごくわずかであって、MN の方が心持ち相手の発言に対する非同調的 dissociative な態度が DN の場合に比べて濃厚ではあるが、この両者はほとんど差異がない、云々。何とも釈然としない説明を読者は与えられるのである。そのように差異がほとんど看取されない両者について非同調的な態度は DN よりも MN の方が多少とも強いと C. が解説を添えるのは、忖度するに、両者を明確に弁別した上でのことではな

く、[6] Bの発話は2通りの解釈が可能なはずで、しかもこのうち一方はechoを含み（＝MN）、他方はechoを含まない（＝DN）というC.の自家了解に合致する解釈を捻り出すためであり、いまの場合のように理論の内的整合性が問題となる論脈では、自説の首尾一貫性を確保するためのドグマティックな見解という疑いが強い。はたして、(21)のBの発言にはC.の説くようなDN/MNの2通りの解釈が可能であるのか。そして、この両者の意味解釈が事実上ひとしくなる（'the upshot will be much the same'）とはどういうことであるか。それならばDNとMNの区別は端から不要ではないのか。「言語形式」が問題となる場合には確かにMNと称しうる発話をDNから区分することができたにも拘らず、それと同じ明確な区分が(21)あるいは先の(11)のタイプの事例に成立しないのは何故であるのか。(21)に見い出されるとC.が主張するようなDN/MNの区別は、じつは、存在しないのではないか。ありもせぬ区別立てをC.は自説が要求する論理的一貫性に促されて無理にも見ているのではないのか。この疑いが読者にはいよいよ募るのである。もしそうであるならば、echoを基軸概念とするC.のMN分析の妥当性には文字どおり一大疑念が生じる。そして、さらにそのことはechoという概念そのものにも深刻な疑念を投げかけるものとなりえよう。

4．「エコー」の機制

筆者の見るところ、事態はまさしくC.の危惧するとおりなのであって、echoという概念の不徹底な理解、そしてそれへの無批判な依存がこのような釈然としない事態を招いていると評さざるをえない。

一者が他者の発言をechoicに繰り返すということは、そのことによって一者が他者と同一の判断の態勢をとるということである。Aの'It's a lovely day for a picnic.'という発話に呼応してBが'It's a lovely day for a picnic (indeed).'と繰り返すということは、BもまたAと同じ判断の態勢をとるということであり、これによって、A、B両者は身体的には互いに異なる個人でありながらも、事実認定の仕方に関しては、いわば一心同体的な理解の態勢を共有するのである。このことはなにも先の(14)(15)のような場合にかぎられるわけではない。われわれが同一の言語を使用するときにはこのような事情が相互の間に成立しているのが常態であって、それゆえに本来、恣意的な物理音［dɔg］があのものとしてわれわれにひとしく意味理解され、これに負うて言語記号が言語記号として成立する。個々人の視角からは著しく

見え姿の異なる対象をひとしく/dɔg/として理解するゆえにこそ、当の対象は外貌・見え姿といった物理的な相違を超えて同一のあのものとして当事者相互に了解されるのである。同じように、一者が‘Mary is happy.’と断定し、別の一者もまた同じ判断の態勢をとって‘Yes, (Mary is happy) indeed.’と断定することにおいて、両者の間には言語を介した相ひとしい事実了解（＝事実判断）が形成される。いわゆる「現実」と呼ばれるものも、このような判断の態勢が言語共同体の成員に共有されることと相即して、そしてそのかぎりにおいて、存立するものである。われわれは言語的実践をふくむ日々の生活実践をとおして、多かれ少なかれひとしい知覚・認知、判断の態勢を共有する者となるのである。このような知覚・認知の仕方、判断の態勢を共有化する過程が「社会化」と称されるものにほかならない。この過程をとおして、異なる世代間の差異化と同一世代内の同質化の傾向をともないながらも、概ね、現実世界が安定的に推移し、漸次的に変化するということが実現する。

ところで、Aの‘She is happy.’に対してBが‘Yes, (she is happy) indeed.’と応じるとき、She is happy. という事実判断はA、Bそれぞれによって抱懐され、この同一の判断が個々人A、Bに帰属する構制となっている。角度を変えて述べれば、これはA、B 2者がそれぞれの知覚・認知、判断の態勢において相ひとしくなる、そのような判断をともに志向するということである。かくして、身体的な次元では別異の2個人A、Bが同一の判断を志向することによって相互に同型化する。このとき両者の志向する「判断」なるものは生身の個人という物理的な次元とは端的に異なる次元に帰属すると見なすことが可能となる。知覚・認知、判断の態勢において多かれ少なかれ同型化された共同体の成員がこのようにしてひとしい判断を志向するとき、そうした判断が帰属せしめられる主体としてわれわれは「ひと one」を立言することができる。「ひと」とは「人並み」の「ひと」であり、「人目」「人見知り」「人前」「人聞き」の「ひと」である。われわれは社会化の過程において、なかんずく言語活動を中核とする日常的な生活実践において、このように理念化された一般者「ひと」を志向し、不断にこの「ひと」を体現（具現）する者として存在しているのである。言語に局限して述べるならば、この「ひと」こそが謂うところの「理想的な話し手―聞き手 the idealized speaker-listener」にほかならない。2者A、Bが互いに判断を同じくするという場合にも、A、Bそれぞれは単なる物理的な一個体という次元を超えて同一の判断者（「ひと」）を具現する構制をとるのであるが、ひと

しい意味理解 — したがってまた、協調的な行動 — が行なわれる場合には常にこの構制が成立している。

話を echo に戻そう。以上の見地に立つならば、一者の［təma : təuz］に対して別の一者が［təma : təuz］と echoic に応じる場合にも、両者は同一の発音を志向し、その発音 — これは音素 phoneme に相当する emic な理念化された存在であるが — の帰属者である一般者「ひと」を我身に体現して［təma : təuz］と発するのである。［təma : təuz］という個々の発音は、異音 allophone ともおなじく、音質・音量等その物理的 etic な性質においては互いに著しく異なりうる。しかし、これにも拘らず、当事者がひとしく一般者「ひと」を体現する事実に負うて双方には tomato という同一の語が指示されていることが了解される。一つの発話が別の発話の echo と当事者によって見なされるという事態は、われわれの見地からは、このように捉え返すことができる。

類似性にもとづく echo という概念は元の発話と繰り返される発話の間の近似性にもっぱら着目した概念であるが、一者 A が他者 B を echo するという場合には、A もまた B と同じ知覚・認知、判断の態勢をとって、B の志向する判断をみずからも志向する。この同調という肝腎の視角が論者たちの唱える echo には欠如しているのである。2 つの発話 X、Y がこのような構制において捉えられるとき、X、Y という現実の発話にはさまざまに相違する点があるにも拘らず、それらは非関与的として捨象され、両者はいずれも理念的なあのものの具現形として同一と見なされる。この同一でありながら、しかし相違する局面をもつ、あるいは、相違しながらも同一である、事態が S&W が類似性と呼ぶものの実態である。そして、「是認 endorsement」とは、論者たちの言うように他者の発言を単に「おうむ返し」に繰り返す行為ではなく、一者が他者とひとしい判断の態勢をとりつつ、当の判断が正当であること、すなわち、その判断がまさしく一般者「ひと」に帰属する（＝「誰しもみな、ひとはそのように判断する」）ものであること、これを表明する行為（「断定」）である。[7] C. が（16b）に関して指摘する（パラ）言語的特徴はこの判断の正当性を明示的に表現する手段と見ることができよう。

では、アイロニーの場合のように、相手の発言を echo することによって話し手の「是認」ではなく、「不賛同（排斥）」の態度が伝えられるのはどのようなメカニズムに拠るのか。先節でも瞥見したように、関連性理論では相手の発言を繰り返す echo という行為に「是認」と「排斥」の 2 つのケースを認め、アイロニーの場合には後者が該当することを主張する。しかし、別

稿[8]でも論じたところであるが、この説明方式ではある発言がアイロニーと解釈されるか否かは、その発言がechoであるかどうかということだけでは当然のことながら判断できず、結局、この判断は、S&Wが現にそうするように、当の発言が「是認」と解釈されるか、それとも「排斥」と解釈されるかに求めざるをえない。これが論点先取りとなっている―つまり、ある発言がアイロニーかどうかを問うているのに、「是認」と解釈されればアイロニーではなく「排斥」と解釈されればアイロニーであると論じるのは、「排斥と解釈されれば」と言うところに当の発話がアイロニーであることが暗黙裡に前提されてしまっている―次第であり、同じ論点の先取りは論者たちが「関連性の原則」を発動させて「是認」の解釈を捨て、「排斥」の解釈を採択する際にも犯されている。S&Wがechoicな発言に「是認」とともにこれとは相反する「排斥」という解釈を認めるのは、煎じつめて言えば、アイロニーは文字どおりとは「反対」の意味を表すという通説的な理解をうけて、この「文字どおりではない」意味を相手に伝達するためにはechoそれ自体の内部に話し手の非同調的な態度、つまりは「否定性」、を担わせざるをえなかったからである、このように結論することがゆるされよう。

本題から議論がそれることを恐れつつも、アイロニカルな発話の「文字どおりではない」意味がどのようにして伝えられるのか、この点に関してわれわれの立場から一言しておくことが議論運びの上からも必要であろう。

相手targetの発言のechoicな繰り返しは、アイロニーにおいても、相手の判断に対する直截的な「是認」の表明である。話し手としてはIt's a lovely day for a picnic. という判断が歴然と事実にもとることを承知の上で敢えて相手のこの不当な判断に同調するのである。このとき話し手には、同じように社会化を経て「ひと」として形成されているかぎり、所与の判断は聞き手をも含めてひろく人々一般によって不当としりぞけられるはずだという確信がある。話し手はこの確信に依拠しつつ、相手の判断に賛同を表明するのである。この「ひと」としての話し手の推論reasoningが当を得たものであるかぎり―むろん、話し手としてはそのように確信しているのであるが―話し手の賛同の表明は当人はもとより、同じく「ひと」たる相手に、そして当事者をとり巻く環視的他者にも、はげしい違和感を喚起するものとなる。この共同体的に喚起（共感）される違和感がS&Wの言う「排斥」ということであり、それは相手の発言を単におうむ返しに繰り返すechoそれ自体のうちにあたかも内蔵されているような代物ではなく、一般者たる「ひと」への反照という過程を経ることによって始めて自他に喚起される底のも

のである。

話がechoに付随する「排斥」に及んだところで、議論の照準を本題たるメタ言語的否定に戻す段である。

さて、前掲の (14)(15) に立ち帰ってみよう。この場合、メアリーの発言 'It's a lovely day for a picnic (indeed).' が先行するピーターの発言と同じ言語表現から成っているという理由でピーターの発言のechoと見なされる論理からすれば、(21) の場合にも、Aの発言 'Mary seems happy these days.' に対するBの発言 'She isn't HAPPY.' には 'happy' という同一の表現が使われているのであるから、Bの発言の(一部)はAの発言のechoと見なされ、そしてその場合の否定はMNと解されて、意味解釈はそれに尽きるはずである。しかしながら、論者たち流の皮相なecho理解のもとでは、Bの発言はメアリーが 'happy' である事態を偽として否定し、これに代えて 'she just puts on a brave face' を真の事態として主張しているとも解され、確かに事実の認定が係わる発話としても意味解釈されるように思われる。それゆえにBの発言は、MNとしての解釈のみならず、DNとして解釈される余地も持たねばならないことになり、C. としても、

(23) ...B's response to A in (24) [=(21)] might be a case of echoic negation, the assertion that 'she's happy' being attributed to A, or it could be an ordinary descriptive use, a counter-assertion to A's assertion. [p.324]

という苦し紛れの論述を行なわざるをえない次序となるのである。C. のこの弥縫的な対応は、先の (14)(15) に関してS&Wが、ピーターの 'It's a lovely day for a picnic.' という発言に対するメアリーの発言 'It's a lovely day for a picnic, indeed.' は「是認」を表すと解釈できるが、しかし現にメアリーの発言はアイロニカルにももちいられるのであるから、この解釈もメアリーの発言に盛り込まねばならない、そこで、echoには「是認」を表す場合とともに「排斥（不賛同)」を表す場合がなくてはならない、と事実迎合的ad hocに対処するのともパラレルを成す。このようにechoに「排斥」を持ち込むことによってS&Wのアイロニー分析が破綻をきたすのと同じく、C. の場合も (21) のBの発言にMNとDNという2つの解釈を読み込むことによって、後述のように、echoという概念の内実の薄弱さが露呈し、echoを駆使するC. のMN分析が、一定の成果を収めながらも、そのじつ精査に

堪えない脆弱なものであることが判明するのである。いずれの場合にもechoという不徹底な概念への依存が理論内的な不整合をもたらしていると言うことができる。

最も典型的には、他者の発言をechoicに繰り返しながら同時にこれを打ち消すMNなるものは、対話の当事者の間に判断の不一致disagreementが見られる場合に特有の現象である。われわれの観点から述べ直せば、当事者が体現（実践）するべき一般者「ひと」の如何が争われている状況である。このことは「言語形式」が問題となるケースを思いやれば容易に了解されよう。'mongoose' の複数形を 'mongeese' と判断するか、それとも 'mongooses' と見るか、言葉の慣用をめぐるこの争いはどちらの言語形式が「正用法」であるかの争いであり、換言すれば、いずれが「理想的な話し手—聞き手」を正統に具現しているかの争いである。この見地に立って、冒頭（1）の例を再検討してみよう：

（1）　a.　We don't eat tom[a : təuz] here, we eat tom[eiDəuz].
　　b.　He isn't neurotic OR paranoid; he's both.
　　c.　I haven't DEPRIVED you of my lecture on negation; I've SPARED you it.
　　d.　She's not my mother; she's my female progenitor.

(1 a)－(1 d) はいずれも現実の事態をどのように認定するかをめぐる当事者の見解の相違を表している。ある現実の事態を言語を介してどのように同定・把握するのが妥当であるか、この認定のありようはわれわれの現実理解の仕方を直接に規定する。しかのみならず、どのような言語的認定が妥当であるかという問題は「言語規範はいかにあるべきか」ということとも直結している。(1 a)－(1 d) のような判断の不一致がそもそも判断の不一致として当事者に感じられるのは、当事者の判断が常に「ひと」としての判断になっているという前述の構制に負うのであり、これによって同じく「ひと」たる相手の判断に違和感を惹起されるということが可能となるのである。(1 e) のような例では、

（1）　e.　The President of New Zealand ISn't foolish; there IS no President of New Zealand.

先行発話として想定される‘The President of New Zealand is foolish.’に対する話し手の違和感が表明されている。話し手のこの違和感は、つまるところ、the President of New Zealand が存在するという前提的了解に対して差し向けられているのであるが、このことは対話行為の本質を示唆していて興味深い。先述のように、われわれは対話的活動をとおして共通の理解を次第に形成し、共同社会の成員としてひとしい事実・知識を有する者となる。対話における前提とは、対話の当事者双方が依拠する知覚・認知、判断の態勢であって、それなくしては対話という協調的行為が成り立たぬものである。対話を介してわれわれは一心同体的に事実判断を抱懐するところとなり、そしてこの共有の基盤に同調することによってさらなる対話を積み重ねるのである。(1 e)はこのようにして対話を経て形成され、すでに共有と目される事実判断の内実 — あるいは、(1 e)のような場合にはむしろ対話に先だって共有されているはずの「世間知 world knowledge」 — に関する争いを表していると見ることができる。

5．対話的対立と「否定」

C. は (21) の ‘She isn’t HAPPY.’ に MN と DN の解釈を認めた上で、どちらの解釈を採っても ‘the upshot will be much the same’ と論じる。しかし、一方、echoic な MN と、他方、non-echoic な DN とが（ほぼ）同一の意味を表すとはいかなる議論であるか。C. のこの議論は相互に排他的である echoic/non-echoic という対立概念がじつは同一概念であるという論理的矛盾を主張することにもほかならない。そして、echoic = non-descriptive ないしは descriptive = non-echoic であることが議論の前提となっている以上、echoic/descriptive という対立概念もまた、この結果、その差異を喪失し、C. の議論を支える基幹概念が、事実上、無効力となる。C. の MN 論が失当として棄却される所以である。

C. が(21)に MN と DN という 2 つの解釈を認めるのは、(21)には echo が認められる半面、また(21)は現実の事態を記述しているとも判断されるからであった。では、echo の場合には事態の記述ということは行なわれないのであるか。C. 流に echo = non-descriptive と定義するかぎり、それが首尾一貫した議論というものである。言語形式が問題となるケースを典拠として、それと同じ形態上の「繰り返し」が見られるかどうかを echo 判定の規準とするかぎり、これらの言語形式が現実の事態を記述するものではないと判断

される以上、その他のechoも同じようにnon-descriptiveと見なされる次第となる。ここに、MN = echoic/non-descriptive、DN = non-echoic/descriptiveという図式ができあがる。ところで、問題の(21)には形態の反復が見られ、したがってBの発言はechoic（= MN）であると判断される。と同時に、しかし、(21)は単に言語形式を問題としているのではなく事実の認定を問題とし、Bの発言は現実の事態を記述しているとも解される。そこで、(21)がechoic（= MN）であり、かつ、descriptive（= DN）であるとは論理の一貫性という点から主張することがゆるされないかぎりにおいて、Bの発言はechoicな解釈（= MN）とは別にもうひとつdescriptiveな解釈（= DN）も可能である、しかし両者の意味の違いは‘much the same’、‘pretty negligible’である云々、という煮え切らない主張が行なわれることになる。しかし、「繰り返し」であるということとdescriptiveであることとはC. の言うように相容れないものであるのか。なるほど、通常の用語法では、言語形式を問題とするMNの場合について、言語記号（happy）をもって同じ言語記号（happy）を「記述」するとは言わないであろう。「記述」という言語の主たる機能が第一義的に向けられるのは何と言っても実践的な現実の世界だからである。しかしながら、C. のように、(21)のBの発言を「繰り返し」が見られるという理由でnon-descriptiveと見なすのははたして妥当であるのか。われわれの見地からはBの発言もまたdescriptiveなのであって、通常の記述との相違は、当の記述が話し手(B)の信奉しない言語規範に即して —つまり、当事他者たる聞き手(A)の信奉する言語規範にのっとって — 行なわれている点にある。この事実に負うて、Bの発言は一見したところAの発言の言語形式を問題としてこれを‘echo’しているとも、他方また、確かに事実の真偽を問題とし、したがってdescriptiveであるとも解釈されるのである。

このような不首尾が生じる根底にはechoに関する論者たちの短見がある。echoという現象には、すでに触れたように、理念的emicなあのもの、より正確には「意味」、つまり、「示差的価値」への言及が不可避的に介在する。この「意味」＝「価値」への同調によって、その具体的eticな顕現たる2者が同じあのものとして理解され、その一方を他方のechoと見なすということが可能となるのであり、相手の発言をechoするということは単なることばの「繰り返し」以上の内実—すなわち、相手と同じ知覚・認知、判断の態勢をとること — を孕んでいる。それゆえに、他者の発言のechoをとおしてその判断に「賛同」「同意」するということが行なわれうるのであり、より

一般的には、同一の言語表現を介してわれわれが共通の事実理解＝現実理解を成就することがかなうのである。そして、相手の発言を「否定」するということもまたこのような同調を不可欠としている。たとえば、一者Aの‘She is happy.’という発言に対して別の一者Bが‘She isn't happy.’と応じる場合にも、BはAが‘She is happy.’と認知・同定するその判断(＝意味理解)の仕方に同調し、Aと同じ判断の態勢をとって当の事態をともかくも‘happy’と認知・同定する。これと同時に、Aに帰属するこの判断をBが違和感をもって「イナ」「不当」としりぞけるというのがいわゆる「否定（否認)」[9]ということであり、一般者「ひと」を体現してAが‘She is happy.’と認定する判断内容が妥当であるか否か、Bもまた同じく一般者「ひと」を実践しつつ、これを争うのである。このような事実判断の食い違いは、通例は、それぞれの判断と現実との照合、あるいは、第三者の判断への参照という手順を経ることによって事の真相（＝真偽）が判明し、よってもって誤解が誤解として解けて、ひとしい事実理解が双方に共有されて収束する。

ところで、(21)のように、Aが‘She is happy.’と認定する事態をBが「イナ」としりぞけ、さらに当の事態をBが‘She puts on a brave face.’と認定する場合には、2つの異なる事実判断が対話的に競合する情況となる。このとき、これらの判断が同一の事態を認定するものと当事者によって見なされているかぎりにおいて、‘happy’と‘put on a brave face’との相違が顕在化する所以となり、Bの発言は「彼女はhappyなのではなくput on a brave faceなのである」のように対比的に解釈される[10]傾動をおのずから生じる。同じ事情は‘She's not HAPPY; she's ECSTATIC.’のようなケースにも *mutatis mutandis* に当てはまる。このときにも、当該事態を‘She is happy.’と見るか、それとも‘She is ecstatic.’と判断するか、当事者の間で事実認定の如何が現に争われているのであるが、この場合、一般に‘happy’と‘ecstatic’とはいずれも同じ意味範疇に属すると理解されるのが通常であり、たがいの事実認定の相違はあたかも事態をより適切に表す「言語表現の選択」の相違と見なされる傾向が俄然、強められる。そして、いわゆる「言語形式」が問題となる場合には、当該対象をhippopotamuses / hippopotamiのどちらをもって認定するのが正当＝正統であるか、あるいは、所与の対象を［təma:təuz］と認定するべきか、それとも［təmeiDəuz］と認定するべきであるか、当事者としてはhippopotamusesとhippopotami、あるいは、［təma:təuz］と［təmeiDəuz］の意味するところが同一である

という了解ー角度を変えて述べれば、両者が同一の単語の異形であるという判断ーに立って、[11] 一方を不当としてしりぞけ、他方を妥当と見るのである。このかぎりにおいて、これらの場合には事実認定の如何は当事者の直接的な関心の埒外に置かれていると言えよう。かくして、宛然、「言語形式」が争点化する。[12]

C. の MN 論は、われわれの見るところ、すでに致命的な破綻を露呈しているのであるが、echoic/descriptive の区別に固執する C. はみずからの MN 分析にまつわる疑念を払拭するために自説を擁護すると思われる証拠を呈示する。ふたたび C. を引用しよう：

(24) A small piece of evidence in favour of maintaining the distinction, despite its sometimes negligible effect on interpretation, comes from a consideration of the formal diagnostics of metalinguistic use, especially the presence of positive polarity items. [p. 324]

このように C. は述べて、次の例を採り上げる：

(25) A : Mary is sometimes late.
B1 : She isn't ever late; she's always punctual.
B2 : She isn't sometimes late; she's always punctual.

(25) に関する C. の主張の眼目は以下のとおりである：

(26) The negative polarity item 'ever' in B1 would indicate descriptive use of the material in the scope of negation, while the positive polarity item 'sometimes' in B2 indicates that A's utterance is being echoed, and, as the follow-up clause shows, it is the truth-conditional content of the utterance that is being objected to. [p. 324]

C. の指摘するように、(25)の A に対する発言 B1、B2 には、B1 に NPI（否定対極表現）の 'ever' が生じているのに比して B2 には PPI（肯定対極表現）'sometimes' が生起している。この違いが、'a small piece' ながら、MN（= B2）と DN（= B1）との区別が厳として存在する証左であると C. は論じるのである。

しかし、事実はどうであろうか。B1にせよB2にせよ、それがAの発言に対する不賛同を表明し、2者A、Bの間で事実認定の如何が争われている以上、それは対話的な対立の生じている情況であり、謂うなれば「神々の争い」とも称しうる事態である。もう少し具体例に即して述べれば、B1のようにNPIが使われる場合にも、BはAの‘Mary is sometimes late.’という事実判断 ―より正確には、‘Mary is sometimes late.’が意味的に含意する‘Mary is late.’という事実判断― に対して‘She isn't ever late.’と違和感を唱え、このAの事実認定をしりぞける（＝否認する）とともに、Aが‘Mary is late.’と認定する事態を、これとは真っ向から対立するかたちで、‘She's always punctual.’と認定するのである。B1の‘ever’は後段の‘always’とも相俟って、この場合、Bの違和感の度合いを強め、A、B両者の対話的対立を際立たせる機能をもつと見ることができよう。一方、これに対してB2では‘sometimes’をふくむ‘Mary is sometimes late.’という事実認定の是非が争点となっている。このときにもBはAが‘Mary is sometimes late.’と認定する事態を、これとは対立的に、‘She is always punctual.’と認定するのであるが、この場合、Aの発話‘Mary is sometimes late.’は意味の上で‘Mary is sometimes not-late（＝punctual）.’を含意する。このかぎりにおいて、A、B両者の事実認定の相違は‘sometimes’と‘always’という「言語表現の選択」に関する違いとして焦点化するように感じられ、Aの‘sometimes’という語の使用をBが「不適切」と見なし、これを‘always’という別の語によって「訂正」するというメタ言語的な解釈が使嗾される。C.はDNとMNの区別立てを擁護することに関心を奪われて、A－B1であれA－B2であれ、そこには対話的対立が生じ、事実認定の仕方をめぐって当事者の判断が拮抗している点を見ようとしない。B2の発言はsometimesがPPIである以上、確かに先行発話を要請する。それゆえに2者の判断が対立する情況が想定されやすく、これがB2では‘A's utterance is being echoed’という解釈を誘引する。しかし、この点ではB1も同断なのであって、B1とB2との違いは、つまるところ、何がA、Bの間で争われているか、[13] ひとえにこの点に懸かっている。

(25) のPPIとNPIの違いがMN/DNの区分を一定度は正当化するとC.は考えるのであるが、MNと解しうる場合にもechoされるのは真偽の認定が係わる真理関数的な内容であり、この内容に対する話し手の非同調的な態度が表わされている。B2の発話がMNと解釈できるとしても、しかし、このように真理関数的な内容が否定されるというのは優れてDNの特質ではな

いのか。折角の‘a small piece of evidence’を提示したあともC.は堂々めぐりの疑念を繰り返すのである:

(27) Throughout the long history of treatments of negation (see Horn, 1989) the consensus has been that there is a perfectly general asymmetry between positives and their corresponding negatives: while utterances of positives are readily interpreted as descriptive assertions without requiring any particular type of contextual assumption, negative utterances are felt to require or suggest a background context containing the corresponding positive proposition. [p. 325]

通説的な了解にしたがって、否定文が一般に肯定的命題の存在を要請すると考えるならば、否定文とはこの前提的な肯定命題を否定する文ということになる。そして、このように前提的な肯定命題をうけてそれに対する排斥的な態度を示すのが否定文だとすると、結局、すべての否定文がechoicであるということになりはしないか。もしそうだとすれば、かたやechoicなMNとかたやnon-echoicなDNという明確に異なる2種類の否定があることを議論の出発点としながら、否定文はすべてechoicである、すなわち、MNである、と主張していることになる。しかし、それではMN/DNという区別がそもそも無用のものとなり、すべての否定文にechoが係わる以上、echoそれ自体もまた没概念に堕してしまう。そして、これは関連性理論の意義をも損ないかねない。

C.としては何としてもMN/DNの区別を維持したいのであるが、そのための傍証として示された(25)は必ずしも説得力があるとは言い難い。この思いはC.みずからも禁じえぬのであって、

(28) ... my account may give some people the uneasy feeling that an intuitively clear distinction is being blurred. This is not because all negative utterances are echoic and it is not, I hope, because I am wrong to postulate a broad class of echoic instances which includes the blatantly formal (metalinguistic) cases together with cases where truth-conditional content is echoed. [p. 326]

と述懐してC. はMN/DNの相違が一目瞭然としている冒頭(2)の例にふたたび議論を回帰させ、論点の確保を図る：

(2)　We didn't see the hippopotamuses.
　a.　We saw the rhinoceroses.
　b.　We saw the hippopotami.

(2)に(2b)が後続する場合にはhippopotamusという単語の複数形が問題となっていることは歴然としている。このときの否定をMNと呼ぶのであるから、この(2b)と(2a)との違いは明白ではないか。なるほど、C. の言うように、(2)－(2a) は「われわれはカバを見なかったけれどもサイは見た」と解釈［＝(i)］されうる。この解釈と(2)－(2b)の解釈との違いは明瞭であると言えよう。しかし、(2)－(2a)はまた「われわれはカバを見たのではなく、サイを見たのだ」とも解釈［＝(ii)］できる。しかのみならず、先の(21)に関するC. 流の分析にしたがうならば、この解釈の場合にもechoic = non-descriptiveな解釈［＝(iia)］とnon-echoic = descriptiveな解釈［＝(iib)］とが可能であることになるが、両者は‘very often the upshot will be much the same’という解説を付されたままで意味の相違が判然としない。他方また、(2)－(2a)がDNと解釈される (i) の場合には、否定文は肯定命題を背景的に要請するという通説からすれば、(2)をふくむすべての否定文がechoicであることにもなるが、C. はこの好ましからざる可能性をいまだ周到に排除しえていない。

このように、(2)によってC. は論点の再確保を企てようとするのであるが、C. のMN論を経由した結果、事態はいよいよ錯綜の観を色濃く呈するありさまで、echoを基幹概念とするC. 流の分析ではMN/DNの区別立てということすらがいまや覚束ない。この事態の行き詰まりがechoという概念の不十全な理解、そしてそれへの安易な依存、に淵源することはすでにして明らかであろう。

では、MNとは一体何であるのか。そして、MNとDNとはどのように区別されるのか。一者Xの‘Isn't it tiring for you to drive to work？’に対する別の一者Yの‘I don't DRIVE to work；I JOG.’はMNであるのか、それともDNであるのか。くどくどしい論述となることをも恐れず、蛇足を付け加えたい。

われわれの見地からは、Yが‘I drive to work.’という事実認定をしりぞけ、これに代わる‘I jog.’という別の事実認定を妥当と主張するかぎりにおいて、Yの発言は事実の真偽が係わるDNと見なすことができる。しかしながら、事実認定が言語を介して行なわれる以上、事実認定の如何は常に言語的認定の仕方 ―つまりは、言語の使い方 ―とも一体不可分である。これゆえに、Yの‘I don't DRIVE to work;I JOG.’は「わたしは車では通勤しないで、ジョギングしながら通勤する」のように本来的に事実認定の如何を問題とする発話であるにも拘らず、あたかもことばの妥当な使い方ないしは「選択」、すなわち、「わたしが通勤するやり方は、あれは‘drive’と見なすべきものではなく、むしろ‘jog’と言うべきだ」を主張するかのように感じられる可能性を常に有している[14]。しかし、‘I haven't DEPRIVED you of my lecture on negation ; I've SPARED you it.’のような事例、さらには‘We don't eat tom[a:təuz] here, we eat tom[eiDəuz].’のようなケースともなると事情は一変する。前者では‘deprive’と‘spare’とが当事者によって同じ意味範疇に帰属すると見なされる度合に即応して、事実認定の争い(DN)が、対話の当事者のみならずこれを第三者的に考察する分析者にとっても、あたかも「言語表現の選択」の争い(MN)でもあるかのように感じられる所以となる。そして、後者の場合には‘tom[a:təuz]’と‘tom[eiDəuz]’とは同一の意味を表すと判断されるのが通例であって、このかぎりにおいて、事実認定の如何(DN)ではなく、「言語形式」の如何(MN)が断然、争点と化する。これを要するに、示差的な差異をその本質とする「意味」＝「概念」なるものが言語形式の「異同」に拠って存立しているということであり、この意味成立の構制が、通常は同一形態の変異形として不問に付される相違にまで、ときとして及びうるということになると思われる。

われわれは日常不断の社会化の過程を経て、単なる一個体以上の「ひと」として知覚・認知、さらには判断の態勢において総じて同型化される。この同型性を拠りどころとして対話という行為が行なわれ、事実認定の妥当性を争うということが可能となる。論者たちの唱えるechoがともかくもechoとして機能し、謂うところの‘dissociative attitude’、すなわち、「違和感」が惹起されるのもわれわれが常に一般者「ひと」を実践する原事実に負うているのである。C. のMN分析に、そして、関連性理論のechoという概念に、欠落しているのはこの根本的な了解である。

注

＊本稿は熊本言語学研究会例会（2003年９月）における発表をその骨子としている。席上、例会の参加者、とりわけ登田龍彦、市川雅巳の両氏からは貴重なご批判を賜った。また、査読をお願いした村尾治彦氏からは懇切かつ痛烈な評言を忝のうした。氏の「頂門の一針」がなければ、小論は（さらに）手ぬるい妥協的な論稿にとどまっていたであろう。誌して深謝の微意を表したい。

1　以下、用例はいずれも Carston(1996)より借用。

2　たとえば、(1 a) に対しては ‘tom[a:t əuz]’ という発音をふくむ他者の発言が一般に想定される。

3　‘... ‘tom[eiD ə uz]’ is not being used to refer to a particular set of entities in the world but instead represents a particular pronunciation which it closely resembles, and ‘get stressed out’ is not used here to represent an emotional state of mind but rather to represent a particular idiom which it resembles (and is possibly identical to).’ [p.320]

4　‘The attitude expressed by these echoic uses is one of rejection. That attitude is made explicit in (17a) [= (9 a)] by the use of negation and is left implicit in (17b) [= (9 b)].’ [p.320]

5　‘... there is an interesting parallel that can be drawn here, with another sort of echoic case, which is often virtually indistinguishable from its descriptive counterpart.’ [p.323]

6　C.　みずからも告白するように、この両者の違いが母語話者たる C. にも判然と見分けがたい。

7　三木（1997）参照。

8　三木（1996）参照。

9　このように対話的に相手の判断をしりぞける場合を特に「否認」と呼び、たとえば、‘Is Mary happy？’ のような疑問文に対する ‘No, she isn’t (happy).’ の場合を「否定」と呼称して両者を区別することは可能である。しかし、後者の場合でも、確かに ‘Mary is happy.’ という判断は発問者によって「断定」されているわけではなく、この意味で発問者に「未帰属」ではあるが、この暫定的な判断（内容）に応答者が違和感を表明し、これを「不当」としてしりぞける点では前者とも同じである。

10　これが McCawley (1991) の言う ‘contrastive negation’ に相当する。McCawley（以下、M.）は、例えば、‘John drank not coffee but tea.’/

'John didn't drink coffee but tea.'/ 'John didn't drink coffee, he drank tea.'およびこれらの変異形（'John drank tea, not coffee.'/'John drank tea, he didn't drink coffee.'）を contrastive negation と呼び、'Chris didn't manage to solve the problem − it was quite easy for him.'/'It's not stewed bunny honey, it's civet de lapin.'/'I'm not a Trotskyite, I'm a Trotskyist.'のような事例を metalinguistic negation と見なして両者を区分しているが、M. の関心は主としてそれぞれの変異形が示す統語的分布の違いに向けられ、当の区分がどのような規準にもとづいて行なわれるのか、その点は必ずしも詳らかに論じられていない。本論にも掲げた Carston (1996) からの引用例、あるいは同じく C. の挙げる 'X: Oh, you're in a miserable foul mood tonight. Y: I'm not in a miserable foul mood; I'm a little tired and would like to be left alone.'/'They're not the best at what they do − they're the only ones who do what they do.' のような例から臆断するに、C. は M. が contrastive negation と見なすケースを metalinguistic negation (MN) と見ると推察される。いずれの例にも先行発話の「繰り返し」が認められ、かつ C. の MN 分析がことばの「繰り返し」としての echo を基軸概念とする以上、それは当然の判断でもあろう。

11　このように hippopotamuses と hippopotami の表すところを「同一」と判断するゆえにこそ、MN が一見、矛盾文と解釈されることにもなる。もちろん、この両形を別の語と見るケースも起こりうる。McCawley (1991) の指摘するとおり、'I know you've been bothered by mongooses, but do you actually have mongeese too?' のような発話は sarcastic に解釈される。話し手は 'mongeese' を正当と確信し、'mongooses' を不当と判断しつつも、敢えて 'mongooses' を正用法と見る相手の判断に同調するのである。かくして、すでに本論で述べたアイロニーの機制が作動する。このようなケースでは、話し手は相手の 'mongooses' を正規の語と見なすと同時に自らの 'mongooses' をそれとは異なる別の語と見なしていると言えよう。

12　C. の示す 'He doesn't need FOUR MATS; he needs MORE FATS.'/ 'X: You seem to be amused by my problem. Y: I'm not Amused by it; I'm BEmused by it.' のようなケースでも、話し手としては、たとえば、'FOUR MATS' と 'MORE FATS' の表すところを一字義通りには、両者はたがいに「異なる」にも拘らず－その音形（と統語形式）の観点から同

一と判断すると同時に、前者を不当としてしりぞけ、後者を正当と主張するのである。このように'FOUR MATS'と'MORE FATS'が当事者によって同一と見なされるかぎりにおいて、この場合にも第一義的には「言語形式」の如何が当事者の関心事となり、音形の類似を原因とすることばの取り(聴き)違い、ないしは混同といった含みが語用論的に伝えられる。しかし、これらはまたそれぞれの表すところが現に「異なっ」ているとも意味理解されるのであり、話し手としては相手の事実認定をしりぞけるに当たって、単にそれとは異なる事実認定を提示するのみならず、たがいの認定の相違が音形上の違いに決定的に係わっていることをも同時に主張するわけであるから、修辞的には、応答者の「当意即妙」の才気が含意される所以ともなる。

13　Iwata(1998)の言う'the focus of echo'がこれに該当する。

14　この可能性は'DRIVE' 'JOG'のようにthe focus of echoが音声的に「対比性」を際立たせられることとも相俟って高められる。そもそも「対比」という行為には、対比される2者を「同」と見なした上でその「異」をあげつらう構制が認められる。

References

Burton-Roberts, Noel(1989), 'On Horn's dilemma:presupposition and negation.' *Journal of Linguistics* 25, 95−125.

Carston, Robyn (1996), 'Metalinguistic negation and echoic use.' *Journal of Pragmatics* 25, 309−330.

Carston, Robyn (2002) , *Thoughts and Utterances : The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.

廣松　渉 (1982),『存在と意味− 事的世界観の定礎』 岩波書店。

Horn, Laurence(1985), 'Metalinguistic negation and pragmatic ambiguity.' *Language* 61, 121−174.

Horn, Laurence(1989), *A Natural History of Negation*. Chicago: Chicago University Press.

Iwata, Seiji(1998), 'Some extensions of the echoic analysis of metalinguistic negation.' *Lingua* 105, 49−65.

McCawley, J.D. (1991), 'Contrastive negation and metalinguistic negation.' *Papers from the 27th Regional Meeting of the Chicago Linguistic*

Society: *Part Two*, 189－206.

三木 悦三 (1996), 「アイロニー論のために」奈良女子大学文学部英語・英米文学科(編)『尾崎寄春・大沼雅彦両教授退官記念論文集』137－149. あぽろん社。

三木 悦三 (1997), 「意味と「遂行性」」 熊本県立大学文学部紀要第3巻(通巻49巻) 127－152.

Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1986) (1995), *Relevance*: *Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1988), 'Representation and relevance.' Ruth Kempson (*ed.*), *Mental Representation* : *The Interface between Language and Reality*, 133－153. Cambridge: Cambridge University Press.

Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1992), 'On verbal irony.' *Lingua* 87, 53－76.